坪内逍遙編纂小学校国語教科書『國語讀本』の医学教材

櫻井 待子¹ 菅 修 一²¹大阪教育大学附属図書館²京都大学経済学部図書室
(前・大阪教育大学附属図書館)

I. はじめに

筆者らは、大阪教育大学附属図書館で明治以降の教科書を整理し、教科書展で教科書を展示したことがある。その際、坪内逍遙が編纂した小学校国語教科書『國語讀本』に出会い、象徴的な人体図を挿絵(図1)にした医学・衛生教材を目にし、このような教材が国語教科書に掲載されていることに驚いた。坪内逍遙の編纂した国語教科書に取り上げられた医学関係の教材を知ること、それは今から百年近く前の小学生が学校教育の中で接した医学情報の一例を知ることになる。

II. 坪内逍遙の教育(教科書)への関心

1. 坪内逍遙にとっての小学国語教科書

坪内逍遙は一般に文学者・作家として著名である。現在の早稲田大学で教鞭をとっていたこと、『小説神髓』を著したことは広く知られている。しかし彼が初等教育に関心を持ち、本名の坪内雄蔵として教科書(読本)を編纂したことを知る人は少ないだろう(図2)。

明治29年の早稲田中学の創立に携わり、教頭となった坪内¹⁾は「遑て、初等教育の実際を精査する必要を感じ」²⁾、当時の教科書や教育の実

情を視察するうち、自ら小学読本を編纂するに至った。

初等教育に関心を持っていた坪内は、教科書編纂に対してどのような意図を持っていたのか。明治33年に完成した『國語讀本』(富山房)のはしがきで彼は、読本教授の間接の目的として「生徒が自然に啓発せられて、読書の利益と面白味とを感得」し、「自ら進んで益々読書せんことを欲するに至るやうに彼等が心を誘発する」³⁾としている。書物に潜んでいる面白さを感じとってほしいという、坪内の人間教育に対する熱意が窺える。

2. どの程度使用されたか

坪内編纂の『國語讀本』(以下、“坪内讀本”と記す場合がある)は全国でどのくらい採用されたのか。『明治検定期教科書採択府県別一覧』⁴⁾をみた。

この一覧によれば、全国47府県のうち坪内讀本が採択されたのは、尋常小学校用訂正再版(明治33.12.19)が山梨、京都、山口、熊本の4府県、訂正四版(明治34.8.23)が新潟、福井、岡山、大分の4県である。高等小学校用訂正再版(明治33.12.26)が京都、山口、鹿児島、大分の3府県、訂正四版(明治34.8.23)が北海道、新潟、福井、高知、大分の5県である。

ちなみに、当時最も採択された府県が多かった金港堂の『國語讀本』が、尋常小学校用で8府県、高等小学校用で11府県であった。

¹Machiko SAKURAI : 〒582-8582 柏原市旭ヶ丘4-698-1.²Shuichi SUGA.

(1998年9月18日 受理)

図1. 國語讀本尋常小學校用 卷八 第十七課
身體の構造（一）（部分）
（大阪教育大学附属図書館蔵）

図2. 國語讀本尋常小學校用 卷八 標題紙
（大阪教育大学附属図書館蔵）

3. 坪内讀本の内容への評価—先行研究から

色川大吉は坪内讀本の進歩性とその限界について論じている⁵⁾。進歩性では、「実用主義一点ばかりではない、科学的思考能力の育成」や「資本主義適応能力の育成」など、時流を見こした人間教育に力を入れている点を評価している。一方、限界として、第一次国定以降情緒性のみを利用され、「『歴史唱歌』にみられるような、おそろべき芸術

的武器にと転化された」と、第一次国定教科書以降への偏った影響について論じている。

宮本真貴子は、当時の国語教育の現状と、坪内の文学者、倫理教育者としての教育観について考察し、「彼にとって教育とは、品性陶冶された人格を育てることであり、それ自体が創造であり芸術であった」と述べている⁶⁾。

石橋武彦は、次のように評価している⁷⁾。「題材は道德、地理、歴史、理科、公民など全般を網羅しているが、文学性や日常生活の身近なものが特に多く取り入れられている」「いままで出版された国語教科書を研究の上、独創的な編集をしているのが特徴である」。

Ⅲ. 富山房の歴史

坪内雄蔵(逍遙)編纂の小学国語讀本を出版したのは富山房であった。富山房の創設者坂本嘉治馬が、坪内に小学讀本教科書の編纂を依頼した。

ここで、坪内讀本出版までの富山房の道程を簡単にみる⁸⁾。

坂本嘉治馬は、明治16年に故郷の高知県宿毛から上京し、小野梓経営の書肆東洋館に就職する。明治19年に小野が他界し東洋館は閉店。東洋館で出版のイロハを学び、小野を師とも仰いでいた坂本は、小野の遺志を継いで同年、富山房を開店する。

富山房は、開店当初は主に洋書の古書を販売していたが、後には洋書の新刊も販売するようになり、高田早苗、天野為之などを通じて早稲田関係の得意先を増やし、出版も手がけて売り上げを伸ばしていった。やがて、大学や中学校向けの教科書出版を手がける。

明治24年に小学校教則大綱が定められ、修身教科書編纂の要綱がでたのを契機に、小学校教科書の出版に着手、明治25年『小學修身経』を発行する。当時は国定制度以前の自由競争時代では

あったものの、小学校読本教科書の内容は「大同小異」で、形式にはまったものであった。そこに着目した坂本嘉治馬は、従来のものから脱却し、新しい方向性をもった読本教科書を作ろうと考えた。そこで東洋館以来の旧知である坪内博士に白羽の矢が立ったのである。

IV. 学校関係の規則から当時の状況を紹介

坪内讀本が使用された時代の小学校教育に関する規則は明治33年8月20日に公布された小学校令である。当時の小学校制度をみる⁹⁾。

小学校には尋常小学校と高等小学校があった(第二條)。尋常小学校の修業年限は四箇年で高等小学校の修業年限は二箇年、三箇年、四箇年の3種類(第十八條)。学齡は満六歳に達した翌月から始まり満十四歳までで、尋常小学校については義務教育となっていた(第三十二條)。

教科は尋常小学校では修身・国語・算数・体操であり、土地の状況によって図画・唱歌・手工や特に女兒に対しては裁縫が付け加えられた(第十九條)。高等小学校の教科には修身・国語・算数・日本歴史・地理・理科・図画・唱歌・体操があり、女兒のためには裁縫が加えられた。なお、高等小学校は修業年限により付け加えられたり、省かれたりする教科があった。

国語についての規定は小学校令施行規則の中にある。少し、長いが引用してみる。「第三條 國語ハ普通ノ言語、日常須知ノ文字及文章ヲ知ラシメ正確ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ養ヒ兼テ智徳ヲ啓発スルヲ以テ要旨トス 尋常小學校ニ於テハ初ハ發音ヲ正シ假名ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方ヲ知ラシメ漸ク進ミテハ日常須知ノ文字及近易ナル普通文ニ及ボシ又言語ヲ練習セシムヘシ 高等小學校ニ於イテハ肖進ミタル程度ニ於イテ日常須知ノ文字及ビ普通文ノ讀ミ方、書キ方、綴リ方ヲ授ケ又言語ヲ練習セシムヘシ…讀本ノ文章ハ平易ニシテ

國語ノ模範ト爲リ且兒童ノ心情ヲ快活純正ナラシムルモノナルヲ要シ其ノ材料ハ修身、歴史、地理、理科其ノ他生活ニ必須ナル事項ニ取り趣味ニ富ムモノタルヘシ…」

今の私たちの常識でいえば医学的な事項は理科か保健体育で学ぶ。しかし、当時の尋常小学校には理科という教科自体がなかった(高等小学校では理科があった)。また、国語の読本の文章の材料として「修身、歴史、地理、理科の他生活に必須なる事項に取り趣味に富むものたるべし」としているのである。国語の中で医学や衛生が語られる背景がここにあった、と筆者は考えている。

V. 坪内讀本の医学・衛生教材の紹介

1. 尋常小学校用

・巻六 第二十課 水ノ功用

水がどのようなことに使われているかを例示している。①料理や洗濯に使われる、②動植物はみな、水を飲んで生きている、③蒸気で動く機械、などである。このうち②では、「水無クバ、人モ、鳥獸モ、虫モ、魚モ、草木モ、皆、コトゴトク死ニハテ」とし、生き物はみな、水を飲んで体を維持していることを説明している。

・巻七 第八課 空氣

この課の冒頭「しののめの空白みて、うすぎり、野末を包む頃、戸外に出でて…」という書き出しは、理科的教材ではあるが文学調の始まりとなっている。朝早く起きて外を散歩すると、清々しい空氣が立ちこめている。日々の情景描写によって、子どもたちに身近に感じさせる導入となっている。

人間は空氣に囲まれて生活しており、空氣がなくなればたちまち死んでしまうとして、人間が呼吸活動によって生命を維持していることを説明している。

さらに、「清きは、健康に益あれど、けがれたるは、有害なり」として、室内の換気をすること

で身体が健やかに保てるという、衛生上の注意も促している。

・巻八 第十七課 身體の構造（一）

身体の構造を、家屋に見立ててわかりやすく説明している。たとえば「骨は柱、梁のごときもの」で身体を支えており、「皮と肉とは壁、ふすまに似たり、体内と体外の隔てをなす」とある。そして身体が一番上にある頭は奥座敷で、ここに「一家の主人のごとく」脳があり、身体のあらゆることをつかさどっている。この奥座敷（脳）から「電信線のよな物」が出ていて、身体の各部に通じ、脳の命令を伝え、また各部から情報を受け取る。これが神経である、としている。

この課の特徴および出色は、身体の構造を子どもが平素目にし身近に感じる家屋に喩えて解説し、さらにそれを図に表していることである（図1）。

図1では、人体の側面図に、各器官を表す人間が配されている。筆者なりの解釈を述べる。まず家（身体）の奥座敷（頭）で、主人である脳が電信線（神経）を使って下へ何かを伝えている。おそらく、空腹を伝えているのだろう。手につながっている電信線は手を上にあげさせ食物をつかむ。つかんだ食物は入口である口に運ばれ、のどのあたりで待つ人は貨車を使って食物を下へおろしている。下で待ち受ける人（胃）は、食物をポンプでバケツに汲み出している。そのさらに下では食物が調理（消化）され、必要なものは隣の部屋に貯蔵され、不必要なものは下の部屋で液体と固体に分けて処理されている。一方、出入口である鼻から空気が吸い込まれると、管の先にいる人（肺）は、新鮮な空気を身体に送り込んでいる。人体がいくつかの部屋からなり、そこでそれぞれの人（器官）が、それぞれの仕事をしており、それらすべての指令を送るのが一家の主人（脳）であることを、端的かつ明解に表現している。

・巻八 第十八課 身體の構造（二）

（二）では主に内臓とそのはたらきについて説

図3. 國語讀本尋常小學校用 巻八 第十八課
身體の構造（二）（部分）
（大阪教育大学附属図書館蔵）

明している（図3）。まず「腹部には、臺所にも比すべき胃というもの」があり、それに腸という長い廊下が続いて、消化した食べ物を身体の一部に送る。さらに胃は、お腹が空くと「空腹なる由を、神経に傳へて、脳に報」じ、脳がまた神経を使って身体を動かし、食べ物を手に取らせ、口に運ばせ、歯にかませる、とある。そして最後に、「我々は、常に、かくの如き機關の和合によりて、身體を保つ也」とし、これらの身体機能がどれか一つでも故障すると、他の機能も故障して命を失う、と結んでいる。

・巻八 第十九課 養生

「身體ハ、根幹ニシテ、才智ハ枝葉、學問、藝術ハ花實ナリ」ではじまるこの課は、何事も身体が健康が基本だと教えている。健康であれば元気に働いてお金を稼ぐことができ、努力して勉強すれば、やがて物事の理に明るくなる。そのためには不養生はするなと教える。ここでいう不養生とは①食べ過ぎ、消化不良、②時間と量を決めて食べない、③不潔、間食、運動不足などである。

現代にも通じる食生活におけるルールであるが、人間は才能だけでなく健康な身体があってこそ、

英知を深め、芸術が花開くという点は、日常のきまりごとを教えるにとどまらず、より高い知を備えた人間の姿を伝えようとしていて興味深い。

次の各教材は、直接医学と関係する内容ではないが、薬品や衛生についての記述が若干見受けられるので紹介しておく。

巻六第九課〈有用なる植物〉では、薬を得ることができるのは、はっか(薄荷)、大おー(大黄)であるとしており、巻七第五課〈女子の務〉では、女性は料理、家事の他に衛生、育児などを修めよとしている。巻七第十七課〈有用ナル金石〉では、鉱物が薬品の製造に用いられることを説明している。巻八第一課〈国史の大要(上)〉では、第十五代応神天皇の時には、織物師、鍛冶、医学、暦法などの学問が入ってきたとしている。巻八第八課〈輸出入品〉では、我が国の輸出入品として綿、石油、毛糸、毛織、薬品…としている。巻八第十二課〈貯蓄〉では、貯金が増えれば「天災、火災、疾病等の急を救う」ことができるとして、病気の際の出費のために、日頃から備えよと説いている。

2. 高等小学校用

・巻三 第五課 胃の腑の説諭

巻三は高等小学校の2年で使用されたものと思われる。つまり、今の小学校6年である。

この教材は身体の器官について擬人法により説明している。具体的にそのあらすじを教材文を引用しながら紹介する。

この教材は「目、鼻、口、手、足などが、胃の腑に對して不平をいだし」それぞれの役割を果たさないでいると、「二三日たつと、手足はなえ、目は凹み、肉は落ち、息は切れ、つまり、自分たちが苦しみはじめたゆゑ、一同、大いに驚き」相談会を開いた。すると、胃の腑がやってきて「諸君が僕を自分勝手のなまけ者と見たのが誤りの始めである」として胃の役割すなわち食物を消化し、滋養分にして、諸方の血管に送る役回りをしてい

るということを説明し、「一圖に僕をそねみ職分を怠ったのが」今回の原因であるという。そして最後に忠実にめいめいの職分をつとめて協力同心する、という教訓を得ている。

本教材については色川大吉が社会有機体説の有力な材料に使われている、と指摘している⁵⁾。

また、石橋武彦が、イソップ寓話にその原典があり内田嘉一が『小學中等科讀本 卷二』(原亮三郎・刊 明治18年再版)第十七「胃ヲ惡テ手足労働セズ」で取り上げているのが初出であると指摘している⁶⁾。筆者は自身の所有する明治検定期の読本教科書と大阪教育大学所蔵の国語教科書を見たところ、岡邨増太郎編述『小學高等讀本 卷一下』(阪上半七・刊 明治20年)第二「胃ヲ惡インデ手足等労働セズ」としてあらわれている。また、第2期国定教科書『尋常小學讀本 卷八』(明治43年)に第二十「胃と身體」として出ている。国定教科書『尋常小學國語讀本 卷八』(大正10年)では第二十五「胃とからだ」として同じストーリーのものが出ている。現代では『楽しい授業』誌で紹介されている¹⁰⁾。

また、明治検定期の大手教科書出版社である金港堂が刊行した『新撰高等日本讀本 上篇三』(明治24訂正再版)において「身體ノ爭ヒ」、『訂正新體讀本 高等小學用 卷四』(明治28訂正四版)、『小學讀本 高等科用 卷四』(明治30訂正再版)において、「身體ノ論爭」という教材がある。これらはやはり身体の器官が擬人法で説明されている教材であるが、胃以外の各器官が胃と対峙してサボタージュし、胃の役割に気づかされるというストーリーをとらず、身体各器官がそれぞれに自己主張し、各器官の活動を怠って身体が衰え、気づいて協力するというストーリーになっている。

・巻三 第六課 食物

主な滋養物を脂肪、澱粉、蛋白質として、それらが多く含まれる食品を掲げる。また、磷酸石灰

も骨を作るのに重要で、菜類や肉類に含まれると述べている。また、食塩の重要性を述べているが、これは後述の巻五第二十四課〈食鹽〉につなげている。また、滋養物を食べても、胃の力が弱くては消化できない、として胃を強くする心掛けを持つように、五つの留意点を列挙している。それは、第一に食事の時刻・回数を一定にすること、第二に食物の種類を選ぶことと変化配合すること、第三に食物の分量をほどほどにすること、第四に程よく運動し休息し睡眠をとること、最後に甚だしく熱い物や冷たい物を食べないようにし、またよく嚼まないで食べるのもよくないことだ、としている。最後に「宜シキヲ得ザル飲食ハ百病ノ源トナル。慎マザルベカラズ」と述べている。

・巻四 第五課 皮膚ノ養生

皮膚は身体を包んでその内側を護っており「身體ノ城壁トモ稱スベシ」と喩えている。

皮膚の養生としては、皮膚を清潔にするために入浴と肌着の交換を適当におこなうことを述べる。また「朝、冷水ヲ全身ニ注グ又ハ冷水ニ潤ヘル手拭モテ全身ヲ拭ウナドモ頗ルヨシ。皮膚ヲ強健ナラシメテ外氣ニ抵抗スルカヲ増ス効能アリ。衛生ノ第一歩トシテカメ行フベキコトナリ」とある。皮膚を強めるために冷水摩擦を勧めている。

・巻五 第二十四課 食鹽

塩の身体での作用を説明。「食欲を促し、滋養分の吸収を活発ならしむるも鹽なり。蛋白質を溶解して血液の循環を盛んならしむるも鹽なり」。

・巻六 第二十二課 日射

太陽の光と熱の果たす役割を日常の諸現象に照らして説明。「病の因となる毒菌は多く湿気ある處に蕃殖す。最も恐るべきバクテリアだにも太陽の高熱にあへば、たやすく死滅するなり。日あたりよき空氣中に傳染病毒の存せざるは、是れが為めなり」という衛生面からの説明がある。

・巻七 第八課 耳

耳の構造を説明しているが、ここでも「耳ノ構

造ヲ物ニ喩フレバ、ホゞ電話機ノ如シ」というような喩え話の技法を用いている。

・巻七 第十一課 目

目の構造について、誰でも知っているエピソードを踏まえながら、説明している（図4）。瞳孔の大きさがかわる理屈を、猫の目がたえず変化することで説明している。また、眼の作用を写真の理屈で考えようとしている。

・巻七 第十六課 看護の心得

看護の上で必要な注意・心がけを述べている。看護者の人柄として、清潔・静穏・綿密・温和・懇切を守り行うことが必要としている。この五つの条件を通例備えているのは、男子より女子であると位置づけている。良妻賢母の考え方が端的にあらわれている。快方に向かって退屈している患者に最もよいのは、「淡泊にして愉快なる浮世話」である、というくだりがある。巻七は現在の中学2年頃にあたる児童が学んだのであろうが、とても大人びた教材であるように感じる。

・巻七 第十七課 ばくてりあ

バクテリアが諸々の病気の原因になること、バクテリアの発生場所、バクテリアが如何にして人体に入り込むか等について説明している。猛獣や毒蛇には人智で勝てるが、この微小生物は人の命を奪うと述べ、予防法を説明している。

図4. 國語讀本高等小學校用 巻七 第十一課 目 (部分)
(個人蔵)

その他、直接医学的な教材ではないものの中にあるエピソードを紹介する。巻二第六課は〈玻璃の發明〉。玻璃はガラスのことである。玻璃がなかったら、「薬品も便宜なる入れものを缺き、…」と述べ、また、顕微鏡や望遠鏡を作ることができないので、「醫學・理學・天文學などの進歩遅滞せざるを得ざるべし」と述べている。

巻五第十三課〈温泉〉は、著名な温泉地の名前、温泉の成分の例を挙げ、温泉が人間の健康に有益であるのは温泉の含む物質によるだけでなく、「地の高燥、境の閑静、空氣の清浄」にもよると説明している。

巻五第十九課〈蚊〉は、蚊に刺されるということについての説明のあと、ぼうふら（本書では“ぼーふり”と呼んでいる）から蚊になるまでのプロセスを追って説明。この教材の末尾でぼうふらが人に益する点として、「(ぼーふりが) 汚キ溜水ノ中ニアル間ハ腐敗セル有機物ヲ取りテ食シ、有害ナル瓦斯ノ発生ヲ防グ」と述べている。

巻七第二十四課〈都會と田舎〉では、衛生面から見た都会生活と田舎暮らしの比較がある。都会は便利なところで、官庁や会社や銀行や学校や劇場や公園や新聞社とともに病院がある。しかし、都会の空氣は不潔で田舎の空氣は清爽である。伝染病の流行は、家屋周密のところできり、都会は衛生上よろしくない、としている。田舎のほうに衛生上その他の危険は少ない、としている。

以上、紹介したが坪内讀本の原本を見ることのできる機会はきわめて少ない。坪内讀本の尋常小学校用全巻と高等小学校用巻一から四については海後宗臣らによる著作¹⁰⁾が、坪内讀本の教材本文を掲載していて有用である。

VI. 終わりに

現在の国語の教科書という言葉や文学という

ものについての教科書である、というイメージが強い。一方、坪内の国語教科書の中には文学的雰囲気やにじませながら、子どもにわかりやすい言葉で医学の一端が語られていたことを知ったことの意義は大きい。今回は坪内逍遙編纂の国語読本教科書について子どもの学んだ医学教材を見たが、明治以降の小学校で子どもたちの学んだ医学教材を見ていこうとすると、坪内と同時代の他の国語教科書ではどうだったのかを見る必要がある。また、他教科での医学教材の取り扱いを見る必要がある。坪内よりもなお時代を遡った時代、逆に坪内よりも後の時代での現れ方についても調査し、子どもが得た医学の知識について知りたい。

なお、Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ-1は櫻井が、Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ-2・Ⅵは菅が担当した。

参考文献

- 1) 唐澤富太郎. 坪内逍遙. 図説教育人物事典(中). 東京: ぎょうせい; 1984. p.145-7.
- 2) 坪内逍遙. 東洋館から富山房へ. 富山房. 東京: 富山房; 1932. p.109.
- 3) 坪内逍遙. 逍遙選集 別巻第三. 東京: 第一書房; 1977. p.691.
- 4) 中村紀久二(研究代表者). 明治検定期教科書採択府県別一覧(教科書変遷研究資料 5). 「教科書の編纂・発行等教科書制度の変遷に関する調査研究」(平成7年度文部省科学研究費補助); 1996.
- 5) 色川大吉. 明治末年の教科書の問題. 歴史・地理教育 1956;20:2-38.
- 6) 宮本真貴子. 坪内逍遙編国語教科書『国語読本』についての研究. 国語教育 1990;6:25-35.
- 7) 石橋武彦. 国語教科書に現われた保健体育思想の研究. 東京: 不昧堂出版; 1975.
- 8) 坂本嘉治馬. 坂本嘉治馬自伝. 出版人の遺文: 富山房: 坂本嘉治馬. 東京: 栗田書店; 1968. 1-86.
- 9) 教育史編纂会. 明治以降教育制度発達史 巻四. 東京: 教育資料調査会; 1964.
- 10) 新総合読本⑩おくすり／胃とからだ. 楽しい授業 1985; 28: 114-6.
- 11) 海後宗臣. 日本教科書大系 近代編第六巻 国語(三). 東京: 講談社; 1964.